

大川学園高等学校 2年 ^{みちかわ}道川 かれん

見えない障害

皆さんは高次脳機能障害という病名を聞いた事がありますか？この障害は脳梗塞や事故、心肺停止による低酸素状態などが原因で脳に損傷が加わり、後遺症が残る病気です。症状は様々ですが注意力や記憶力、言語に障害が残る場合があります。また、状況に合わせた臨機応変な対応ができなくなる遂行機能障害やこだわり、怒りの感情が強くてできるようになる社会的行動障害など、外見からは分かりづらい症状であることから「目に見えない障害」とも言われています。

なぜ私がこの話をしたかと言うと今年の2月20日、夜の出来事。当時小学6年生の弟と留守番をしており、2人でご飯を食べ始めていました。急に静かになったので気になって、パッと弟の方をみると、睨みつけるように一点を見つめて硬直していました。最初はふざけているのかと思い名前を呼ぶだけでしたが、次第に酷くなりどれだけ呼びかけても、体を揺すっても反応がありません。少し経って落ち着いてから布団に寝かせた後、熱を測りました。会話ができる状態だった為、「何度だった？」と問いかけたときにはもう返事はなく、すぐに激しい痙攣が始まりました。初めて目にする弟の姿に涙が止まらず、私自身パニックになってしまいました。その後は、救急車で搬送され約2ヶ月の入院生活が続きました。今もはっきりとした原因は分かりませんが痙攣の症状と軽度の高次脳機能障害が残っています。現在、弟は中学生になり、退院後は活発な性格から新たに交友関係を築いたり、自分の好きなことに熱中したりと充実した日々を過ごしています。障害が軽度なこともあり、できることも沢山あります。そのため、同級生達と同じように生活しているとどうしてもクラスメイトから後遺症の部分を忘れられてしまったり、目上の人から中学生なんだからと言われてしまったりすることもあるようです。このように目に見えない障害は、どれだけ本人が悩んでいても、身近な人でさえ気づきにくく配慮が難しいのが特徴です。

そんな中で母が、同じ病気で悩んでいる当事者や家族の声をまとめた本を目にしました。脳損傷友の会。非売品のため、母がそこに電話をかけて本を取り寄せてくれました。私も手にとって読んでみると、「本人の意思や病状が伝わりにくく、理解されづらい。」と書かれたページがありました。この特徴を踏まえて、「共通理解の場」を設けた会社では、障害の有無にかかわらず得意不得意なことをそれぞれ話し合い、それを活かして仕事を分担することで業務がより円滑に進み、当事者にとって安心して働ける環境になったという実例もあります。

今でも、あの時のことを思い出したり、以前の弟と変わった一面を見たりすると、私がもっとしっかりしていれば、後遺症は残らなかったのではないかと悩んでしまうことがあります。それでも今は弟のために、これから私たち家族でどんなサポートをしていけば楽しんで過ごしていけるかと前向きに話し合っています。

す。まずは、小さな一歩として高次脳機能障害や目に見えない障害がある人の実態を多くの人に知ってもらえるように身近な人に話していきたいです。

目に見えない障害や様々なセクシャリティなどは、見た目で分からないが故に他者から気づかれにくいのが現状です。そのため私たちは知らぬ間に当事者を苦しめてしまうことがあります。価値観や概念などを押し付けてしまう前に、お互いに相手の考えを聞き、その人を知ってどのように受け止めるのか。こうした些細なきっかけから一人一人が徐々に行動に移していくことが、多様性を認め合うことが重要視された現代社会において大切であると言えるでしょう。